

月歩学歩

わくわく体験研修 特集号

未知の出来事、未知の文化...未知と出会って未知ことに挑戦する時。未知の自分に出会う時。そんな時、私たちの心は自然と踊ります。

本学2年生の教養基礎科目「フィールドワーク」は、過去の学生たちの声により、「”わくわく”する体験ができるから」と、自然と「わくわく体験研修」と呼ばれるようになりました。

今年もどんな”わくわく”が起こったのでしょうか。さらにその他、授業の一環として行われたフィールドワークもありました。そんな「わくわく体験研修」を特集号としてお送りします。

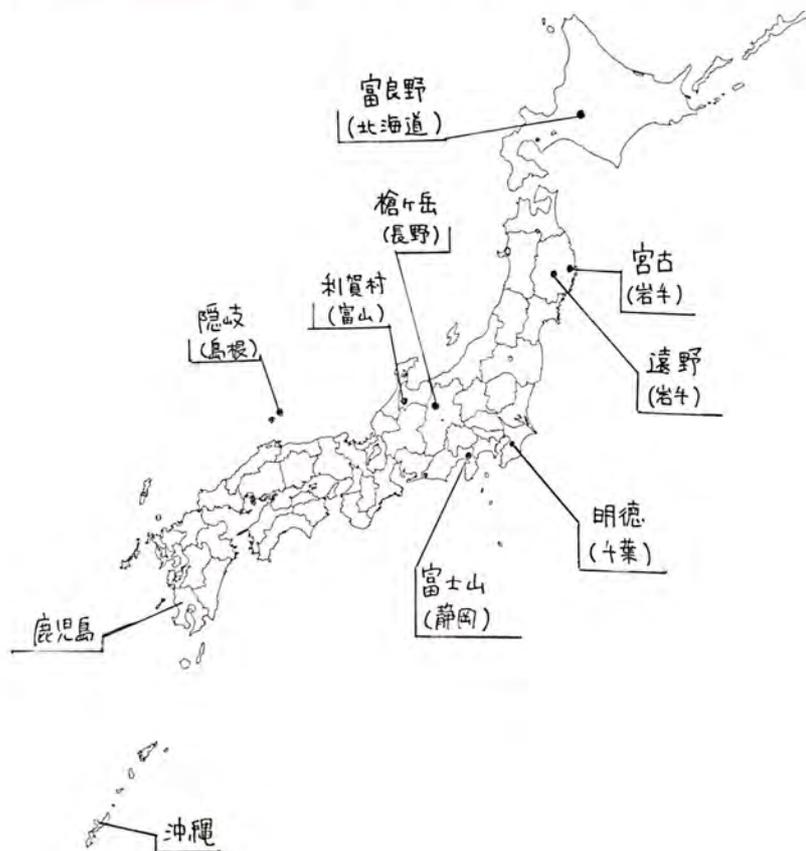
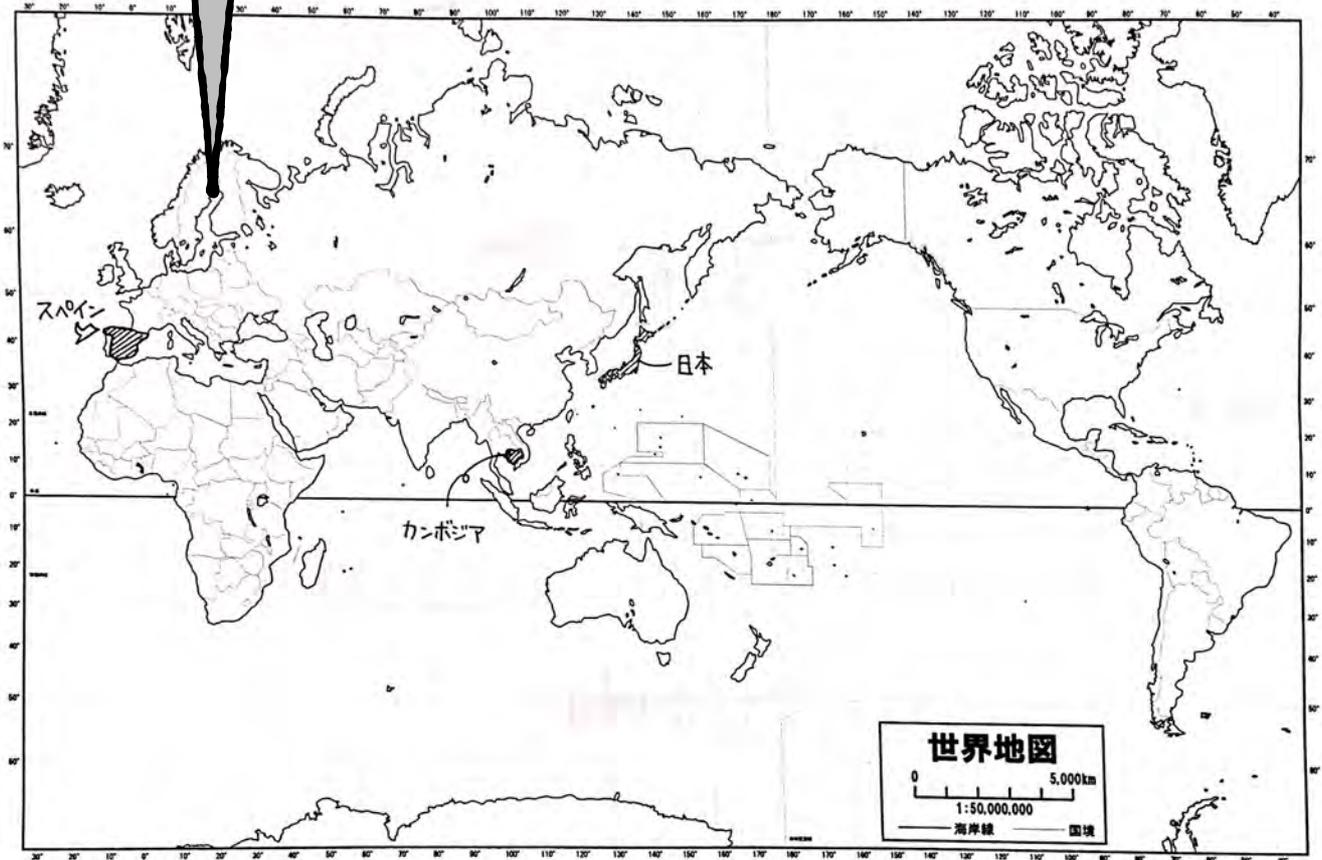


千葉明德短期大学で「フィールドワーク」と呼ばれているものには、大きく分けて2つあります。

一つは、教養基礎科目「フィールドワークⅠ・Ⅱ・Ⅲ」。通称「わくわく体験研修」と呼ばれているものです。もう一つは、授業の一環として行われる学外学習です。今年の夏は、2年生の卒業必修科目「現代社会論」の各論「消費生活と手仕事」のフィールドワーク、また、授業として行われているものではありませんが、被災地の今を知るために、毎年行われている「東北スタディツアー」も行われました。それぞれのフィールドワークがどのようなものであったのか、次のページからご紹介します。

コース名	ページ
スペイン ～子どもと芸術～	4
隠岐の人間と文化に出会う旅	6
昔話が息づく町 遠野	8
沖縄の生活と文化、その体験の試み	10
生活と文化を考える ～富山県利賀村研修～	12
世界の最貧国・カンボジアの子どもたち	14
福祉の音プロジェクト ～手話合唱でコンサート～	16
鹿児島のかども、大人と出逢う	18
Sense of Wonderの発見	20
富士山の頂から観る ～登山と自然、自分自身を考える～	22
東北スタディツアー	24
「北の国から」の現地を訪れる旅	26

それぞれの「わくわく」がどこで起こったか、地図で確認！



スペイン ～子どもと芸術～

行き先▷カンタブリア州都 サンタンデル

日程▷2014年9月15日～21日



概要

北スペイン・カンタブリアの州都サンタンデルを訪れます。

現地ではホームステイをさせて頂きながら、歴史的な街の散策、幼稚園訪問、サンタンデル音楽院の学生さんたちとの共同コンサート等を行います。

何よりもスペインの方々との交流は、その後の生き方の大きな道標になる体験になると思います。

参加可能人数はホームステイ受け入れ先の関係で5～6名です。

活動内容

日にち	内容
9/15 (月)	ドイツ・フランクフルト 経由でスペイン・ビルバオに到着。
9/16 (火)	中世の姿を残すサンティジャーナ・デル・マルを散策。
9/17 (水)	2つの幼稚園を訪問し子どもたちと交流。
9/18 (木)	サンタンデル音楽院において現地学生との共同コンサートを開催。
9/19 (金)	サンタンデル市内散策の他、現地ホームステイ・ファミリーとの親睦会。
9/20 (土)	大西洋に面し、ガウディ建築の残る小さな村コミージャスを散策。
9/21 (日)	ドイツ・フランクフルト 経由で22日帰国。



▶私の中で大きく印象に残っているのは、二カ所の幼稚園訪問と音楽院でのソーラン節と手話合唱のコンサートです。幼稚園訪問では、事前に手遊びやリトミックを考えスペインの子どもたちと一緒に行いました。最初はどの子どもたちに遊びを伝えればいいのか、子どもたちは楽しんでくれるのか不安に思いましたが、言葉は何を言っているか通じなくても手や足の動作や顔の表情で子どもたちに伝わり、一緒になって体を動かしてくれる子がたくさん喜んでくれているような様子でした。また、音楽院のコンサートでは「ことばといのち」の手話合唱とソーラン節の発表を行いました。プログラムの一番最後の手話合唱が終わると、舞台から見た客席はたくさんの拍手と歓声、仲間やホストファミリーの涙が見えて、感動とほっとした気持ちで私もメンバーも涙が止まりませんでした。日本とスペインで言葉の壁がある中、伝えたいことを一生懸命伝えようと頑張ってジェスチャーを試みたり、表情を豊かに表現してみたり、本を見ながらもスペイン語を使ってみたりと国境を越えて繋がることができ、人と人との出会いの素晴らしさを身をもって知りました。Muchas gracias. . . (前川 莉那)

▶まずはじめに、スペインでの日々を言葉や文字にして表してよいのだろうか、と迷ってしまうほど、あの素晴らしい日々を重ねる。ここで何らかの形としてまとめてしまえば、また一つの区切りがついてしまいそうで、悲しくも思ってしまう。間違いなく学生生活、この20年の人生の中で一番の出来事といっても過言ではないだろう。迎えてくれた家族の方々は家族愛に溢れる本当に温かい方たちで、私たちがスペインでの日々を過ごすにあたって一番の支えとなったのは間違いない。出会う人すべてが本当に素晴らしい方々であった。国や文化の違い、言葉の壁というのは些細なことであって、人間の優しさは世界のどこでも誰しもが持ち合わせているものだと感じる。(森 誉太)

▶夜に港を散歩したり、スーパーで買い物したり、海に行ったり、バイクで灯台まで連れて行ってってくれたり、日本のお菓子が感動してくれたり、コンサート後にパーティーをしたり、サプライズでフラメンコの衣装を着たり、野原でランチをしたり、クラブに行ったり、たくさんの思い出を作ることが出来ました。またスペイン語だけでなく日本語を教えてお互いの国の言葉を覚えたりもしました。同年代の友達たちが私たちを楽しませるために沢山プランを考えてくれたのだと考えると、同じように恩返しをしたいと思いました。来年はそれを超えられるくらいのおもてなしをしようと思います。(坂本 真子)

▶スペイン・ビルバオ空港に着くと今年の夏に日本に来てくれた友達や私のホストファミリーが迎えに来てくれました。私は、「友達に会えたこと」「スペイン語に触れたこと」この二つを浴びてスペインについていることを自覚し、嬉しくなりました。私は「スペイン語にチャレンジしたい」と家族に伝えると「ホントに!?わからなかったら言ってね」と言ってくれ「家族との会話は、スペイン語」という生活がスタートしました。音楽院に着くと「私の家よ」と声を掛けていく家族に対し私たちは、ドキドキしながらもこんな幸せな時間になるとは思っていなかったでしょう。日付を跨いだ頃、携帯のLINEが鳴り始めました。それは、同じように気持ちの高ぶりや時差で眠れないスペイン組のLINEでした。みんな同じことを考え、感じていることを改めて再確認できたひと時でした。(新田 雅幸)

▶ホストファミリーのお父さんやお母さんは、私が英語がほとんどできなくても一生懸命伝えようとし、気にかけてくれました。家族同士はいつも話が絶えず、笑顔に溢れていました。スペイン滞在中にはコンサートやパーティーなど様々な経験をし、どれも大切なものですが、やっぱり一番心に残っていることはスペインの家族に出会えたことです。スペインでの日々は一生の宝物です。これからもスペインで出会った人たちの思い出は、一つ一つ大事にしていきたいと思いました。(山崎 友希英)

▶毎日が一瞬で過ぎて行きました。やはり一番大きい出来事は音楽院のホールでソーラン節と手話合唱を行ったことです。練習を重ねるごとにみんなでこうした方がいいと思う、など案を出しあい、踊りを教え合い、みんな必死に練習しました。そして本番、スペインの仲間が応援してくれる中で舞台に出ました。一つひとつダンスを終える中でだんだんと楽しさが大きくなり、手話合唱を行った時、私たちの声をみんなが聴いていると思うと、もっと伝えたい、聴いてもらいたい、という気持ちが大きくなりました。発表を終えると、涙を流しながら、「心からありがとう」と言ってくれたハビエル先生。言葉が通じなくても伝えよう、伝えたい、という気持ちがあれば伝わるんだ、と実感しました。(花香 有佳里)

隠岐の人間と文化に出会う旅

行き先▷島根県隠岐郡隠岐の島町

日程▷2014年9月13日～19日



概要

島根県隠岐の島のログハウスで共同生活をしながら、知的障害者施設「仁万の里（にまのさと）」と、地元保育所「都万（つま）保育所」での研修、地元の方たちにお世話になりながら、隠岐ならではの体験をします。隠岐での生活を通し、人と共に暮らすことについて考えます。

活動内容

日にち	内容
9/13 (土)	●飛行機、鬼太郎列車、フェリーを乗り継ぎ、隠岐の島へ向かう。 ●隠岐の島到着 ●貝拾い ●地元の方々へご挨拶 ●ログハウスで自炊
9/14 (日)	●そば打ち体験 ●自家用船で海遊び&魚釣り→さばき、頂く。
9/15 (月)	●島後散策（サザエ村、シーカヤック等） ●魚さばき、頂く。
9/16 (火)	●都万保育所・施設「仁万の里」での研修 ●すくびすくい&さばき
9/17 (水)	●都万保育所・施設「仁万の里」での研修 ●漁師さんに習いサザエ割り&魚釣り→漁師さん始め地元の方々とBBQ
9/18 (木)	●都万保育所・施設「仁万の里」での研修 ●施設職員の方々とBBQ
9/19 (金)	●島前観光 ●島とのお別れ...久々の本土（鳥取県）、帰路へ



隠岐に行き、まず思ったことは、なんて綺麗なところなのだろうということです。前は海、ふり返れば山...その海も山もとても綺麗で、こういうところに来ると、自然と気持ちも綺麗になったように感じるのだと思いました。5日目の研修の後、漁師の方を始め、地元の方々とのBBQがありました。たくさんの方が、私たちに美味しいものを食べさせようと、たくさんのアワビやサザエ、魚を持って来て下さいました。「うまいだろう!」「これもうまいぞ!」とたくさん食べさせて頂いて、島のこともたくさん教えて下さいました。他にも、海遊びや魚釣り、釣った魚のさばき方講座、夜のさよりすくい、そば粉と水だけで作る隠岐そば打ち、夜中に特別綺麗に見える星観測...など、隠岐だからこそできる体験をと、たくさんの方が私たちのために動いて下さったことに、感謝の気持ちでいっぱいです。

また、あしべさん（大変お世話になった飲食店の方）の温かい励ましの言葉は、本当に心に響きました。初めて会った方から、あんなに熱く「頑張れ」と言われたことがなかったので、涙が出ました。「”いつてらっしゃい”と見送るから、また島に来た時は”おかえり”と出迎えるからね。一度来たらみんな家族だよ」と言って下さったこともとても嬉しかったです。家族でもないのに、親しい友人でもないのに、離れた島で私たちのことを応援してくれる人がいる。そう思うと、頑張ろうと思えます。この1週間で出会った人たちのことは、忘れません。（佐久間 奈々）



千葉ではファミレスや居酒屋などにすぐ入ることができますが、隠岐ではファミレスもなく、お店に行ってもお断りされ、すぐに入れませんでした。しかし、それは隠岐の方たちが、お客さんに新鮮で美味しいものを食べさせようと誇りを持っているからこそ、自分ができる範囲のことを考えているためで、安易に受け入れないのだと知り、隠岐の方の優しさと誇りを感じました。（高橋 千耀）



一週間暮らしていて思ったことは、来る前は「島暮らしいいな」「楽しそう」「のんびりできて良さそう」など安易な考えでしたが、実際に生活している人たちの暮らしを見て、「暮らしてみたい」と簡単に言うてはいけないなと感じました。人が温かく楽しそうなのはあてはまりますが、島だからこそ大変なこともあると思いました。「安易な考えじゃ、どこでもやっていけない」とそう感じました。（斎藤 夏季）

昔話が息づく町 遠野

行き先▷岩手県遠野市、釜石市

日程▷2014年9月10日～14日



概要

生活が時代と共に変化する一方で、昔ながらの生活の中で育まれてきたものを次世代に伝えようとする動きがある。今を生きる者として、そして保育に関わる者として、私たちは何を受け継ぎ、何を子どもたちに伝えていくのか。

柳田国男の『遠野物語』で知られる遠野には、昔話や習俗などを伝える施設があり、様々な人が遠野の文化を伝えようとしている。それらの取り組みを通して、自分たちの文化について考える端緒としてもらいたい。

活動内容

日にち	内容
9/10 (水)	●とおの物語の館・遠野市立博物館見学（博物館は学芸員の解説付き） 宿泊：遠野ユースホステル
9/11 (木)	●土淵保育園で昔話交流会（お互いに遠野・千葉の昔話を語り合う） ●伝承園・常堅寺・カッパ淵見学 宿泊：農家民泊（一人一軒）
9/12 (金)	●農作業体験（内容は宿泊先による） 宿泊：農家民泊（一人一軒）
9/13 (土)	●釜石散策 ●平倉神楽の練習を見学 宿泊：福山荘
9/14 (日)	●遠野文化研究センターで振り返り・発表 ※お世話になったNPOや農家の方も招待



私たちがこのわくわく研修を選んだ理由は、『遠野物語』に興味を持ったからです。

元々、天狗、河童などの妖怪が大好きで、どんな妖怪がいるのか、どんなことをするのかを調べていました。そんな中、私は『遠野物語』に出会いました。オシラサマや馬と河童にまつわる物語があるということを知り、興味を持ちました。遠野に着き、とおの物語の館や遠野市立博物館、伝承園を巡り、物語にまつわる土地を見てまわりました。そして現地の保育園では子どもたちとかわりました。その保育園では子どもたちが「昔話を語る」という取り組みをしていました。それは、子どもたちが昔話を身近に感じられるように行っている活動ということでした。聞かせて頂いた御礼に私たちも千葉の昔話を語りました。その後カップ淵など、昔話に語られていた土地を巡りました。そしてそこから農家の方の家へお世話になり、それぞれのお宅で農作業を体験しました。野菜の収穫や畑の作成、人形劇の活動の手伝い、出荷準備など様々なことを体験し、農作業の大変さ、やりがい、人と協力する大切さなど、様々なことをこの体験で学びました。

活動の最終日は、釜石へ行き、津波被害の現場と、周辺の散策をしました。散策時には、薬師公園や海岸の堤防を見て回りました。その際、津波時にどれくらいの高さがあったのか、どんな場所に避難したのか等の標示が目に見え、驚きました。何よりも印象深かったのは、「桑畑書店」という建物でした。この建物は震災時のまま残っていて、津波の悲惨さを物語っていました。天井は崩れ、電灯はぶらさがっていました。大震災の時、ここには一体どれくらい人がいたのか、その人たちや地元の人など多くの人が被害を受けたのではと思うと、胸が痛くなりました。その後、遠野に伝わる神楽のひとつ「平倉神楽」を見学しました。「権現様」という獅子のようなものを使用して舞ったり、笛や太鼓に合わせて踊ったりと、激しくありながらきれいに舞う姿を見ることができました。



このフィールドワークで、私たちが感じたのは「伝統を大切に作る心」と「人と人との繋がり」でした。『遠野物語』は、親から子へと伝承されていて、小学校などでも授業として取り組んでいる場所もあります。そのように伝承されているものを大切にしていこうという心がよく伝わりました。また、休憩できる場所に寄ると、「どこから来たの?」「岩手はどう?」と地元の人から声をかけられることが多くありました。千葉ではそんなことはなく、戸惑いましたが、良い人ばかりで「行って良かった」と思える研修でした。機会があれば、是非もう一度行きたいです。(中橋 ありす)

沖縄の生活と文化、 その体験の試み

行き先▷沖縄県大宜味村白浜、那覇市

日程▷2014年9月12日～18日



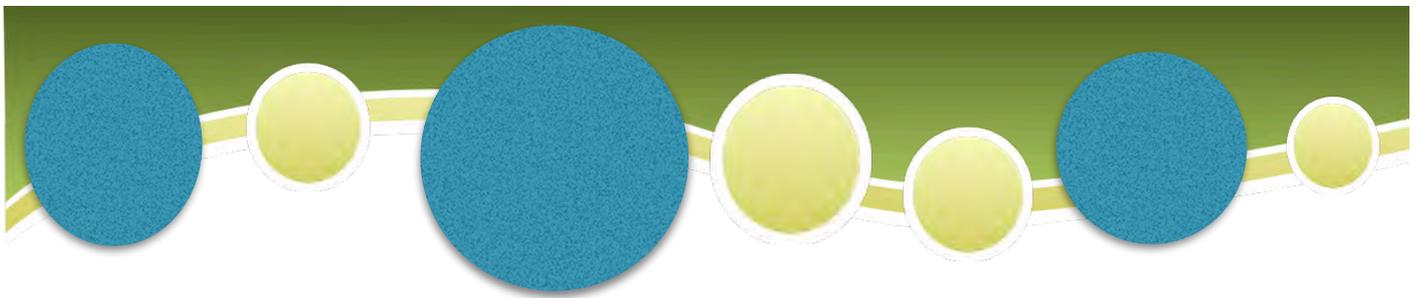
概要

沖縄の生活と文化、沖縄の自然・空や海、沖縄の時間の流れ、そして沖縄の人々の温かさ、これらを体験し、自分自身について考える機会とする。私たちの日常生活は、コンビニ、スーパー、自動販売機等、お金があれば何でもすぐに手に入れることができる。こうした日常性から少し距離を置く生活を体験してみたいと思う。

活動内容

日にち	内容
9/12 (金)	沖縄着
9/13 (土)	午前中保育園訪問、藍染め体験
9/14 (日)	
9/15 (月)	
9/16 (火)	
9/17 (水)	
9/18 (木)	

右ページ参照



9/12～18まで、わくわく体験研修で沖縄県に行きました。コンセプトは自分の今の生活からかけ離れた場所、環境で生活することでした。

初めての場所、初めて出会う人と触れ合いどんな事を考えるか、自分たちのこれからを考えたりしよう。そういった話を事前にされていました。生活をする大宜味村は大自然に囲まれていて、寝泊りをする部屋は自分の家と比べると、シンプルを通り越して「こんなところで寝るの?」「こんな汚い所で5日間も?」そんな感想でした。そして毎日足を運ぶコンビニも、暑さをしのぐエアコンも、明かりを灯す街灯も、周りにはありません。周りには海、森、住居者がいるか定かではない家。ここで生活ができる人、そして生活をしている人は何が楽しいのだろうと思いました。

そんな気持ちの中、夕食を協力して作り、初めて会う現地の方々に温かく迎えられる、当然のように携帯をいじりながら、皆で囲む食卓では、コンセプトなど頭の中にはなく、睡魔に耐え切れずに就寝してしまいました。そんな普段と変わらない生活を三日間続けた先に待っていたのは「何のためにここに来た?」そんな言葉でした。問われて初めて生活を振り返り、温かく迎えてくださった方々に対する自分の失礼な態度、行動を初めて恥ずかしいと思いました。

5日目に那覇で先生と合流する約束をし、途方に暮れる私たちだけで那覇で生活をしましたが、何の計画もなかったのも何にも感じることもなく時間が過ぎるのを待つだけでした。要するに私たちは生活する場所が変わっても今の生活と、考えと、行動と、変わらなかったのです。初めての地で感じた大宜味村に住んでいる人の生活がなぜ成り立っているのか、何が楽しいのか、そんな疑問の答えは、「生活のために考える」、「行動する」、「沢山のひとと触れ合う」という、私たちがしようとしに行き、しなかった事でした。自分の生活を改め、考え、行動することをしなくてはいけない、と沖縄から帰ってきてから思うようになりましたが、正直、行動にはなかなか移せずにはいます。しかし、私たちが今生きている時代で、これから生きていくために、そういったことをしていけないといけないのです。

同行してくださった篠先生、村でお世話になった方々に迷惑をかけてしまいましたが、天候に恵まれた7日間で、怪我一つなく帰って来れたこと、私たちに温かく迎えて下さったことは、短い短大生活の中の一つの思い出です。(吉田 きく)

生活と文化を考える

～富山県利賀村研修～

行き先▷富山県南砺市利賀村

日程▷2014年9月13日～20日



概要

富山県の山の中で約1週間の村の暮らし体験を行います。コンビニをはじめ都会的なものは一切ありませんが、村の方々の温かい気持ちはいっぱいあります。人と人のつながりが濃く残る地域での生活を通して、自分たち自身の暮らしを見つめ直したいと思います。

活動内容

日にち	内容
9/13 (土)	移動 (千葉→高岡→利賀村)
9/14 (日)	合掌集落 (世界遺産) 見学 / こどもみらい館見学
9/15 (月)	慶応大学牛島ゼミ (利賀ゼミ) 発表会参加 / 農業体験
9/16 (火)	保育園にて保育参加・農業体験 (選択) / そば打ち岩魚つかみ取り
9/17 (水)	保育園にて保育参加・農業体験 (選択) / 紙漉き体験
9/18 (木)	保育園にて保育参加・農業体験 (選択) / 民謡体験
9/19 (金)	保育園にて保育参加 / 自然林散策 + 村の方々との交流 (連日民泊)
9/20 (土)	移動 (利賀村→高岡→千葉)



利賀村に行って感じたことは、人と人とのかかわりがすごく濃いということです。そして、8日間で人の温かさを一番感じました。利賀村は、自分たちの普段の生活とは随分違う環境でした。人は少ないですが、人の輪がつながっていて、皆が名前を知っていることはもちろん、家には鍵をかけなくても大丈夫な関係で、帰宅したら差し入れが置いてあったりするようなところです。「みんな家族みたいなものだから」という村の人の言葉を聞いて、村には本当に家族のような付き合いがあるのだなと感じました。それがうらやましいなとも思いました。大都市圏では、近所付き合いが少ないのが現状です。私が小さい頃はまだ近所付き合いもありましたが、それでも利賀村ほどの濃さではありませんでした。利賀村は一軒一軒が離れていても付き合いがありますし、村民体育祭等のイベントもあり、何がちがうのかな？と考えました。一番は、かかわりを持つという気持ちなのかなと思います。かかわろうと思えば、私たちが住んでいる所で近所付き合いが広がったりするのかなと思いました。岩魚や山菜、そして豊かな自然に恵まれた環境が村にはあります。その一方で携帯の電波が入りにくかったり、ショッピング街などの便利なものはありませんが、そういうものがなくても実は生きていけると思っています。8日間過ごしてみて、また行きたい、もっと居たいと思えるくらい利賀村での生活に魅力を感じました。(三浦 晃)



利賀村ではいろいろな方のお宅に泊めさせていただきました。皆さんすごく優しく沢山お話をしてくれました。初めての人と話すのが苦手な、初日はどうなるのだろうと思いましたが、皆さん明るい人だったので話しやすかったです。あるお宅でバーベキューをやったときは、大人の人たちの間に入り話をしました。大人たちの真ん中に座って話すのも初めてだったので、すごく緊張しました。



でも、大人の方たちとの会話は自分にとって一番意味があったのではないかと考えています。私はいつも大人(先生・親以外)といると緊張する、怖いということで話すのを避けていました。この利賀村での会話で少し他の大人とも話せるようになったと思います。これから保育者になっても保護者の方と話したりするので、その時のためにも、もっといろいろな人と会話をしていきたいと思うようになりました。(前澤 祐菜)

世界の最貧国・ カンボジアの子どもたち

行き先▷プノンペン、シェムリアップ

日程▷2014年9月12日～19日



概要

カンボジアの首都プノンペンを中心としたフィールドとして体験研修を行います。児童養護施設や貧困地域の幼稚園・小学校を訪問し、子どもたちと遊び、触れ合い、コミュニケーションを取る中で、子どもたちがどのような暮らしを行っているかを垣間見ることを体験します。 ※なお来年はアンコールワットには行かない予定。

活動内容

日にち	内容
9/12(金)	●成田発→ハノイ経由→シェムリアップ着
9/13(土)	●アンコールワット等見学 ●シェムリアップ発→プノンペン着
9/14(日)	●ライトハウス(児童養護施設)訪問
9/15(月)	●キリングフィールド見学 ●トゥールスレン収容所見学
9/16(火)	●SCADP(学校)訪問 ●PPCIL(障害者自立生活センター)訪問
9/17(水)	●CCH(児童養護施設)訪問 ●Krousar Thmey(児童養護施設)訪問
9/18(木)	●VCAO(学校)訪問 ●王宮等観光 ●プノンペン発
9/19(金)	●ホーチミン経由→成田着



今年も、学生12名と一緒にカンボジアに行ってきました。学生個々が感じたことは、さまざまですが、共通する点もあります。ひとつは、子どもたちの純粋さです。実習で日本の子どもたちと接している学生たちにとっては、日本との比較からみてもなおさらなのかもしれません。また、自分の保育の実践とからめて考察する学生も少なからずいます。以下、学生の感想をご紹介します。

異国体験（しかも単なる旅行ではない）は、人生の中でもそう味わえるものではありません。そんな体験をしたい学生とまた来年のわくわくも企画していきたいと考えています。（教員：山野 良一）

1週間、沢山の施設、学校で子どもに出会った。どの施設や場所でも印象に残っているのは、**子どものキラキラした笑顔**だ。異国の子どもと遊ぶことに不安もあったが、子どもたちの笑顔で不安はすべて吹っ飛んだ気がした。言葉が通じず、英語だって全く話せないのになぜか楽しく遊べていた。特に特別なことを考えて行ったわけでもないのにおりがみを一緒に折ったり風船をつつきあったり、それだけで自然に笑顔になっていたし、みんなを見てもすごく楽しそうなのを感じた。子どもたちの中にはお金がない子や両親がいない子など小さな体に沢山抱えているものがあるはずなのに目はキラキラして期待しているように見えた。（遠矢 花琳）

カンボジアの学校や児童養護施設などでの子どもとの関わりは、一生ものだと思う。**言葉がなくても一緒に遊べる、一緒に楽しめる**。これは、今思うととてもすごい発見なのではないかと思う。一緒に楽しもうと心から考えることそのものの大事さを実感することとなった。これはどこの国でも同じで、日本の子どもとの関わりの上でも、一緒に楽しむことの大事さというのは、変わらないと思う。こちらが変に気構える必要はなく、むしろこちら子どもになってしまうことが必要であるのかもしれない。上手くは言えないが、よく子どもと同じ目線に立つことが重要と言われるのは、つまりこういうことなのかと実感できた。（杉本 裕樹）



福祉の音プロジェクト

～手話合唱でコンサート～

日程▷基本的に毎週水曜日の午後に行っています。



概要

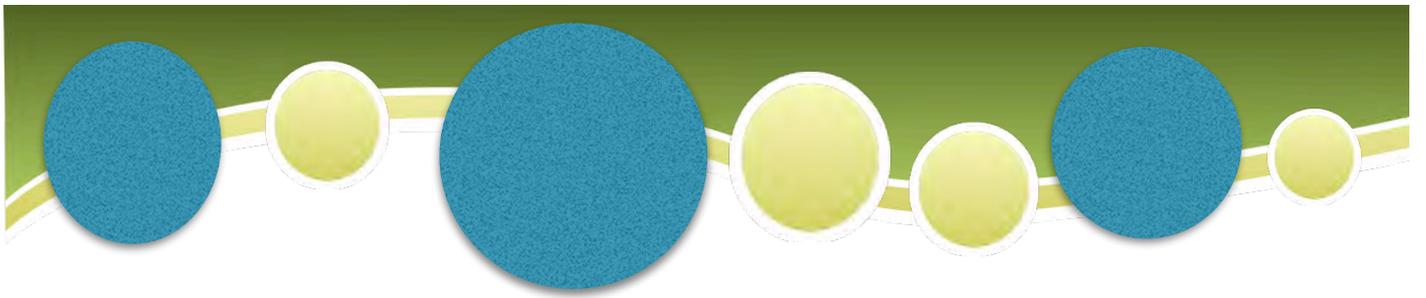
南米ベネズエラ・ボリバル共和国に、世界の奇跡と呼ばれる“エル・システム”という音楽教育プログラムがあり、その一つに耳の聞こえない子どもたちの合唱団、ホワイト・ハンズ・コーラスがあります。彼らに「音楽は好き？」と問いかけると、「大好き！ 音楽のない人生は考えられない」と答えます。神秘的なこの光景は、内なるものへの眼差しから遠く離れた我々に何かを語りかけているように思えてならないのです。

活動内容

ここにヒントを得て、今年度から2年生のフィールドワーク、1年生の基礎ゼミで手話合唱を核にした「福祉の音プロジェクト」をスタートしました。聾者の方々をはじめ、様々な境遇の方々から、我々の知らない、というより忘れてしまった本来内にあるもの、内なる声を教えて頂き、社会の一員として、自分の立ち位置や在り様を一緒に考えたいと思います。

このプロジェクトは当フィールドワーク、1年生基礎ゼミ、フィールドワーク「スペイン」、時には2年生「現代社会論」明石クラスと連携しており、学校の外との交流プログラムとして国内外で広げて行きたいと強く願っています。

後期の活動としては、黒柳徹子さんが創設した聾者の方々のための文化的施設・トット文化館を訪問することや、同館代表代行を務められた聾者で俳優の井崎哲也氏をお招きし、レクチャー・コンサートを開催しました。（*編注：裏表紙参照）



私がこのプロジェクトに参加することとなったきっかけは、些細なものでした。私が理念としている身体や音楽を使った保育、という面で何かヒントが掴めるのではないだろうか、というのが大きな理由で、明石先生の情熱が伝わってきたというのも理由としてあります。

プロジェクト始動当初は、これほどまでに打ち込めるプロジェクトになるとは思っていませんでした。しかし、今の私はこのプロジェクトに参加させて頂いたことを誇りに思っています。

私は他の多くのメンバーよりも、ほんの少しですが、大きな舞台を経験しています。その、ほんの少しの経験が、私をここまで熱中させたという他ならない事実があります。音楽の力は何か。もはや神秘といってもいいでしょう。私たちは何度か大勢の前で披露する機会を頂きます。特に印象的だったのはやはり、スペイン。音楽院でのコンサートで100名以上の前で披露した時に頂いた歓声、スタンディングオベーションは今でもなお、目を瞑ると蘇ります。また、6人でS保育園の先生方の前で披露させて頂いた際も、"心に響いた"といって頂いたことがあり、私にとっては、その先生方の言葉一つ一つが心に響いたと同時に、不思議な感情も抱くようになりました。"なぜ、私たちの音楽で感動するのか"。もちろん私たちは誰もが熱意を持って心の底からこの曲を披露しています。プロジェクト参加者一人一人によって思いは違うと思いますが、私はこの曲を通して少しでも音楽という美しい芸術に触れ、その輪が広がってほしいという思いを持っています。例え全盲であっても、耳が聞こえない子であっても、"音楽のない人生は考えられない"と言った言葉を今では心から共感できると思っています。

私は今後ともこのプロジェクトに携わっていきます。これから明德の学生、明石先生を中心にどんどん大きくなっていくプロジェクトだと思っています。そしていつか、私が不思議に思ったことの答えを感じられる日が来るだろうと信じています。(森 誉太)

私は手話に興味を持っていたので参加したいと思いました。でも、歌が得意ではないので参加しようか迷いました。明石先生と話した時に、通常の合唱みたいにきっちりしたものではなく、みんなで楽しく出来るように沢山の人が参加してほしいと言ってくれました。その言葉で気持ちが楽になり参加することに決めました。はじめは歌詞と手話を覚えるのに必死だったと思います。本当だったら、歌詞の意味や想いを考えられる余裕があったら良かったと後から思いました。手話合唱をする前に聾者の方々が手話で歌っている姿を見て、本当に耳が聞こえないのかと疑ってしまうくらい笑顔で歌っていたことが印象的でした。障壁を乗り越え、心で繋がっていると感じました。その人たちにとって、そのことがどれだけ幸せなことなのかという想いが歌詞に込められているとわかりました。

学園祭やわくわくの発表で大勢の前で発表したことはとても緊張しましたが、見てくれた人たちの"感動したよ"という一言がとても嬉しく思いました。歌詞の意味や気持ちが相手に伝わり、言葉の大切さを改めて感じました。音程を合わせて上手に歌うことは大切だけど、気持ちを合わせて歌うことが明石先生が初めに言っていたことだと私は思いました。そして歌だけでなく、"伝える"ということ意識して生活していきたいと思いました。(板橋 亜由美)

鹿児島の子ども、大人と出逢う

行き先▷鹿児島県

日程▷2014年9月15日～20日



概要

鹿児島という地域に根ざした保育園・出版社を訪ね、そこで生活する子どもや大人と出逢い、宿泊しながら生活を共にし、交流を深める。生活の中では、その糧である食料を自給自足するために、釣りや鴨の解体及び調理などを体験する。（*研修期間中は原則断りなく携帯電話・スマートフォン等使用禁止）

活動内容

日にち	内容
9/15（月）	移動 さとのもり保育園フィールドワーク
9/16（火）	さとのもり保育園フィールドワーク
9/17（水）	まくらざき保育園フィールドワーク
9/18（木）	まくらざき保育園フィールドワーク
9/19（金）	南方新社フィールドワーク（合鴨解体体験・宿泊）
9/20（土）	研修メンバー活動（鹿児島市内観光）



鹿児島県のさとのもり保育園、まくらぎ保育園、南方新社に行ってきました！

さとのもり保育園では子どもと思いきり遊ぶこと、その中で子どもと同じ立場になるとはどのようなことなのかを学ぶことができました。子どもと一緒に泥だらけになり、朝から昼食時までとことん遊びました。

私たちの中で「思いきり遊ぶと子ども全体を把握することができなかった」という意見が出ました。保育者の方は「でも、子どもたちと本気で遊ぶのは楽しいよね。子どもにとっても良いことだし。だから、私たちは保育者間で連携をとって役割分担をしているの」と答えて下さいました。

そのような連携は簡単にとれることではないと思います。この保育園は何故できるのか。私が語るのも恐縮ですが、「混ぜる、混ぜる」という考えがキーワードになっているのではないかと思います。



枕崎保育園の遊具・玩具は三種類の土と水と板くらいしかありません。

しかし、子どもたちは泥を使って自分たちで色々な遊びをします。三種類の泥はそれぞれ肌触りが全然違いました。子どもはそれぞれの泥の違いを楽しんだり、泥山から跳んだり、滑ったりして遊びます。

私が思ったのは泥の肌触りが違うなどの気づきはやってみないと気づかないということです。私は参加するまで気づきませんでした。しかもそれを遊びとして子どもに提供するといった柔軟な発想も中々できないと思います。参加して気づくことはメンバーでそれぞれでした。ここでも遊びに参加していくことの大切さを学びました。

南方新社ではカモを絞める行程を手伝わせてもらいました。見た目は正直残酷だと思いました。しかし、私たちが普段食べている物も同じなのだと思うと自然に食べ物への感謝の気持ちがこみ上げてきました。いや、食べ物というより、命に対してでしょうか。私はもう簡単に「いただきます」と言えません。

米・野菜・食事の作り方、肉のさばき方を何でも知っている人たちは子どもに話すネタも多いですね。私は子どもが興味を持てるようになればとても素敵だと思いました。

3か所についてお話をしました。学び・気づき等の言葉が何度か出ましたが、何も堅苦しい研修ではありませんよ。私はとても楽しかったですし勉強にもなったので満足しています。1年生も来年是非行ってみてください！（井上 和幸）



SENSE OF WONDERの発見

行き先▷長野県松本市槍ヶ岳

日程▷2014年7月30日、10月3日～5日



概要

科目名の「センスオブワンダー」は自然に対する驚異や畏敬や感動を意味する。これは子どもの成長に不可欠であり、保育者にも必要である。これを養成するために学内に泊まり込んでセミの羽化を観察し、北アルプス山中でキャンプをして温泉掘りをする。

活動内容

日にち	内容
7/30(水)	●一晩かけてセミの幼虫を見つけ、一晩かけて羽化するところを観察する。 ●中学校の天体観察。
10/3(金)	●高瀬ダムから9キロ歩き、湯俣温泉に到着。
10/4(土)	●湯俣温泉から西方槍ヶ岳展望台へハイキング。●噴湯丘付近で温泉掘り。
10/5(日)	●また9キロ歩き松本へ... ●観光 ●馬刺を食す ●電車で帰路へ



センスオブワンダーの意味...それは自然の驚異や不思議に感動すること

センスオブワンダーしたい！ということで最初に集まったメンバーは5人でした。7月末には学校の裏でセミの幼虫を捕まえてきて、学校でほぼ眠らずに夜通し羽化を観察しました。羽化に失敗しそうなセミをどうしても助けたくて、メンバー全員でなんとか捕まえてきたすべてのセミを羽化させることができました。最初は少し抵抗があったセミも一晩見守っていると可愛く思えました。最後にみんなで自然に返しました。この日は夜にセミの観察だけではなく、中学校の天文台に行き、天体観測もさせてもらいました。大きい望遠鏡にメンバーは大興奮！センスオブワンダーの2回目の活動である温泉掘りのときも山だから星は見えるよと言われ、それも楽しみにして第一回を終えました。

ついにメインイベント！北アルプスの湯俣温泉というところに温泉掘りに行ってきました！メンバーの一人が都合が合わなくなってしまい、理事長+学生4人で行きました。千葉から特急で信濃大町まで。駅からタクシーで高瀬ダムまで行き、その先は車が入れないので約10kmずっと川沿いを晴嵐荘を目指して歩いて行きました。大きなザックを背負って歩いていたので歩くのが辛くて、休憩をはさみながらなんとか到着してすぐにテントを張りました。山で電気もないので、暗くならないうちに外でごはんを作らなければならなかったので大変でした。3日間ごはん作りは寒さと虫と夜は暗さとの戦いでした。みんな手際がわりと良くてごはんはスムーズにでき、おいしくいただきました。ごはんを食べたり山小屋の温泉に入ったりしましたが、早い時間にやることも終わり電波もない、明かりもないようなところで、夜がとても長く感じました。寒かったです。テントの外で星を見ながら学生と理事長で語り合いました。山での朝は、寒くて目覚めた記憶があります。



2日目の午前中は軽ハイキングということで山小屋の裏から展望台に向かって登って行きました。足場も不安定でとても大変でした。展望台についてまわりの景色を見渡すと天気も良かったので槍ヶ岳が見えたり、周りの山や自分たちが立っているところの高さがすごくよく分かりました。自然の雄大さ、自分たちの小ささを感じ、不思議な感覚でした。この日の午後は高瀬川の上流方面に向かって歩いていき、温泉掘りに行きました。お湯が沸きだしているところから毎年理事長は温度を計っているそうで、今年は過去最高温度の89℃！持参した卵を温泉卵にしたり、たき火をしてマシュマロを焼いたりもして楽しみました。噴湯丘という天然記念物がありましたが見た目は巨大なスライムという感じでした。帰る日の朝は片付けに時間がかかり、出発時間が少し遅くなってしまったので急いでタクシーの迎えが待つダムまで戻りました。その後は電車で松本まで移動して国宝の松本城を見たりお昼は馬刺しをごちそうして頂いたりしました。

普段千葉では体験できないような自然体験、普段学校に居てもなかなかかかわることのない理事長ともかかわれて、良かったなと思います！わくわく体験研修でどこかに行くことも楽しいけど、先生や学生同士のつながりも深くなるので行けて良かったなと本当に思いました！（久保田 美帆）

富士山の頂から観る

～登山と自然、自分自身を考える～

行き先▷ 筑波山、仙丈ヶ岳、富士山

日程▷ 5月、7月、9月



概要

このコースの目的は、富士登山を含むいくつかの登山を通して、自然と文化について、挑戦する心、仲間との助け合いなどを知ることです。一昨年より、学生と富士登山を始めましたが、いずれの機会も五合目からの登山でした。今年は「0から頂上を目指す」という目標を持って取り組みました。準備として、筑波山（877m）、仙丈ヶ岳（3033m）を経験して、富士山（3776m）に挑みました。

このチャレンジで何が育ったのか、何が変化したのか、まだわかりません。しかし、学生たちがこうしたチャレンジに参加しようと意欲を持つこと、実際に体調を整え参加できたことに敬意を表したいと思います。いつか、辛くなったら、このチャレンジを思い出してもらいたいと思います。一步一步着実に歩を進めればそのうちきっとゴールが見えてくることを実践して行って欲しいと思います。これからも、常に何かにチャレンジし、その中から新たな価値や学びを得てもらいたいと切に願っています。

活動内容

日にち	内容
9/9(火)	新宿駅集合（8:30）→富士山駅着・登山開始（11:30）→5合目佐藤小屋到着（17:00）
9/10(水)	佐藤小屋出発（9:00）→本8合目（15:00）→頂上・お鉢巡り→本8合目トモエ館着（18:30）
9/11(木)	起床（2:00）→再び山頂へ（ご来光）→下山（7:30）→5合目着（11:00）→新宿へ



私がこの登山に参加しようと思ったきっかけは、「ただ費用が安いから」、「世界遺産に登ってみたいからいいんじゃないか」という簡単な理由でした。登山なんて今までやってみようなんて思ったこともなく、一生やらないだろうと思っていました。私の中ではこれは挑戦でした。

富士山までに、筑波山、仙丈ヶ岳と登ってきて「あ、これは無理だ」と実感が湧いてきました。だんだんと富士山に対して、楽しみだけでなく、恐怖心が出てきてしまい、当日の朝まで諦めようとしていました。しかし、実際に富士登山をしている時に、私の体調を心配してくれてペースを合わせてくれた仲間がいつもそばにいました。誰一人私を見捨てることはせず、勇気づける言葉をたくさんかけてくれました。

登山をしていて思ったことは、何より人との出会いの大切さ、人の温かさのすばらしさでした。初めて会った人でも「頑張れ」と、優しく声をかけてくれる。普段は知らない人とすれ違って挨拶なんてすることはありませんが、登山をしている時は、挨拶をすることが当たり前になっていました。こんなにもたった一言が自分の力になることを実感させてくれました。

富士登山のメンバーがいなかったら、私はきっと諦めていました。 本当に感謝の気持ちで一杯です。皆さんも是非、一度登山を体験してみてください！ 新しい発見や自分自身を見つめ直すことが出来る良いきっかけになると思います！（渡邊 ひかる）

私は今回の富士登山は二度目の経験でした。1年生の時に登りましたが、疲れがピークに達してしまい、お鉢巡りをしないまま下山したため、後悔が残り、今回リベンジを試みました。しかし、はじめはリベンジが目標だったのですが、長い時間、仲間と共に登っていくと、1人1人の魅力を感じ始めました。特に応援する姿は印象的で自分達も辛はずなのに『がんばれ！ もうちょっと！！』と声を掛け合っていました。自分も自然と応援しあってとても素敵な関係だと感じました。とても楽しかったです。一方、テーマであった「自分と向き合う」という事はあまりの辛さにできませんでした。しかし、その中で声をかけあう仲間の姿を魅力的に感じたり、御来光を見るために、普段あまり話さないメンバーと再度登ることでその人たちと仲良くなったりしました。下山した後は1合目から10合目、お鉢巡りを達成したということに満足し、自信にもつながりました。

今回私が学んだ事はやはり、仲間の大切さです。登っているときはとても辛かったです。けれど、『頑張れ！』と声をかけあうと自然と自分も声が出ていて頑張ろうと思えてきました。もしかしたらそれはみんなにとっては当たり前なことなのかもしれません。けれど、誰かが弱くなっている時こそ励ます言葉が出てくる人が素敵だと感じました。そして、そんな人たちが仲間であってよかった、自分もそんな人になれるように努力したいと思いました。（尾崎 莉奈）

興味本位で「富士山に登りたい」と思っていたのですが、実際に富士登山を経験してみて、とても貴重な体験だったのだと思いました。富士山に登る前に、筑波山・仙丈ヶ岳と2つの山を登ってきましたが、筑波山でさえも「大変」と感じてしまい、少々不安に思っていました。富士山は、本来なら五合目から登り始めますが、私たちは富士山駅から頂上を目指しました。一合目～五合目の道のりがとにかく長く、気が遠くなりそうでした。また、みんなで頂上まで行きましたが、少人数でご来光を見にもう一度頂上へ行きました。「今の自分には厳しいかもしれない」と思いつつも、“決めたことはやり遂げる”と自分に言い聞かせ一緒に頑張りました。雲がかかっている ご来光を見ることはできませんでしたが、二度頂上に行ったという達成感を味わいました。登山中は自分のことで精一杯になってしまいましたが、「頑張れ」と励ましてくれたり ペースを考えて合わせてくれたりと、仲間のおかげで、無理をしすぎずに登ることができたと思います。

1年生の時に 24時間ウォークを経験しましたが、今回の登山と感覚がとても似ていました。どうしても辛いことをすると逃げたくなります。自分との闘いだと思いました。それから、仲間のサポートや優しさ、思いやり。このメンバーだからこそやり遂げることができました。

頂上まで自分たちの足で歩いて、みんなで達成できたことを誇りに思うし、胸を張って自慢できます。これから先辛いことがあっても、今回の登山のことなどを思い出せば乗り越えられると思います。（庄司 玲菜）

東北スタディツアー



行き先▷岩手県沿岸地域、宮城県気仙沼市

日程▷2014年8月16日～18日

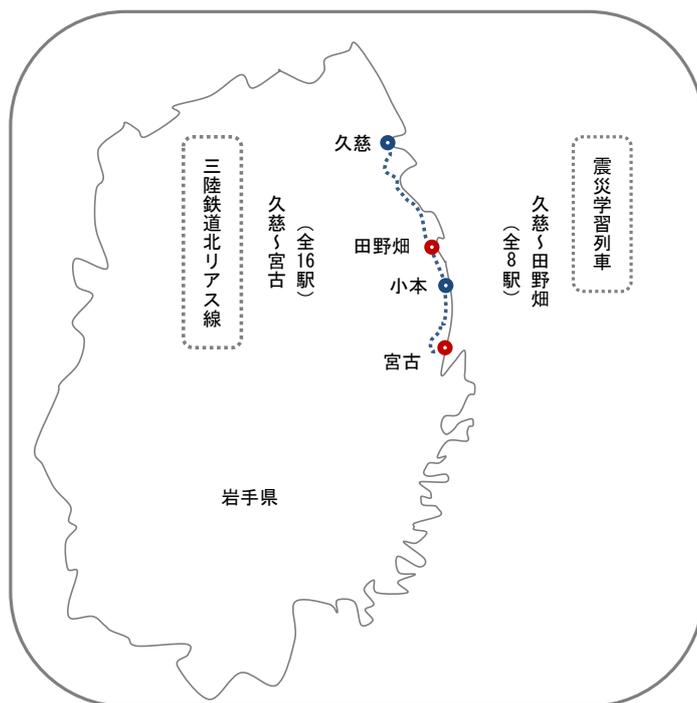
参加団体▷ひかりの子学園、大東文化大学、千葉明德学園（明德そでの保育園、千葉明德短期大学附属幼稚園、千葉明德短期大学）

概要

東北被災地を訪ねるこのツアーも3年目になります。私たちに今できることは何でしょうか？ それは東北被災地のことを「忘れないこと」、そしてそのために「ずっとつながっている」ことだと思っています。ずっとつながっているためにはまず東北被災地の現状を知らなければなりません。したがってこのスタディツアーは、東北の現状を知りつながっていくことが大きな目的です。

- その後の情景を見て、私たちはどう感じるのか？
- その間、現地の人たちはどんな思いでこの地を見つめてきたのか？
- この旅を共にする参加者は何を思い、どのように感じるのか？

それらを語りあい、共に東北を忘れずつながっていくこともこのスタディツアーの大きな目的です。



活動内容

日にち	内容
8/16 (土)	●移動バス車内で：映画『遺体』、津波の記録動画放映 ●宮古市にて北村嘉勝先生と合流、宮古漁港・浄土ヶ浜探索 ●ホテルにて自己紹介
8/17 (日)	●宮古教会にて礼拝 ●震災学習列車「三陸鉄道」 ●小本漁港にて乗船体験、被災地ガイド ●北村先生のお話「"3.11から三年半"～"つながり"とは?～」
8/18 (月)	●宮城県気仙沼 ●復興屋台村にて昼食 ●現代社会論<各論>「消費生活と手仕事」はレンタカーで福島へ ●帰路



私たちは東北スタディツアーを振り返り、2点について話し合ったことを発表しました。

1点目は「震災学習列車でお話を聞いて、自分たちの防災意識を見直す」です。震災学習列車は、岩手県の三陸海岸を走る三陸鉄道の列車です。私たちは久慈駅～田野畑駅に乗車し、被災地の「今」を列車で移動しながら直接「見て」「聞いて」「感じて」、防災について考えました。

2点目は「北村嘉勝先生のお話を聞いて、人と人とのつながりについて考える」です。本学の学生・教職員は震災以後、東北スタディツアーとして毎年被災地を訪問しており、宮古市在住の北村先生にいつもお会いしています。今回、北村先生には「“3. 11”から三年半～“つながり”とは？～」と題して、人と人とのつながりについてお話していただきました。

1. 震災学習列車でお話を聞いて、自分たちの防災意識を見直す。

まずは、自分たちの防災意識についてです。3. 11が起こる前の私の防災意識は限りなく低く、大丈夫だろうという根拠のない自信を持っていました。けれど実際に3. 11の大きな地震を経験し、その直後は防災に対しての意識を持っていたのに、時間の経過と共にその気持ちは薄れていってしまいました。

8月に東北に行き、現状を目の当たりにした私たちでしたが、防災意識はまだまだ低いと感じます。現状としては、所々に震災の余韻は残っていますが、ほとんどは復興されていました。けれど3. 11当日の写真や映像を見た時、自然の恐さを感じると同時に、人間の無力さも感じました。

今のままの防災意識だけでは、全く対策になっていないと思いました。

日中、私たちの家族はそれぞれの場所で生活していて、その中で何か起こってしまった時、各々がどう動き、何をするのか。まずは家族でそうしたことと向き合って話すところから始める必要があると思います。3. 11の時のような事態を繰り返さないよう、自分のためにも周りの大切な人のためにも、防災意識は常に持続して持っていなければならないことです。

私は日頃から、もしも今災害が起こってしまったらどうするか、と災害が起きた時の自分の行動を意識して、家族や周りの人と防災意識を共有していきたいと思っています。

2. 北村嘉勝先生のお話を聞いて、人と人とのつながりについて考える。

続いて、北村先生から人と人とのつながりのお話を聞いて考えたことです。私たちはこれまで“人と人とのつながり”について実感を持たないまま生きてきたのだと思いました。また、人と向き合う仕事に就こうとしている私たちが、“人とのつながり”について考えていないことに気づかされ、このままではいけないと思いました。

今は携帯電話が普及し、極端なことを言えば、直接人と関わらなくても生きていける社会になっています。しかし、便利になっても人とのつながりは失ってはいけないと思います。

身近な人とつながり直すということは、周りの人に感謝することだと思います。今の私たちがいるのは、たくさんの人の支えがあるからこそです。人に支えられて成長してきたことに感謝をし、精一杯生きていくこと、そして自分が支えてもらった分、別の誰かを支えていくことが“人とつながり直す”ことだと思います。（高尾 麻衣子）



「北の国から」の現地を訪れる旅

行き先▷北海道富良野市、銀山

日程▷2014年9月16日～19日



概要

生活に必要なものは、全てお金を出して買う。つまり、消費することが生活だと思いがちな現代。そんな今、生活の原点に立ち返り、ゼロ地点からの生活を組み立てることを提唱・実践されている倉本聡さんのメッセージを受け止め、自分の生き方に内面化するため、倉本さんの本拠地を訪れ学習を深める。

活動内容

日にち	内容
9/16(火)	富良野を訪れ、「北の国から」の資料館や建物を見学研修
9/17(水)	富良野、旭山動物園、札幌へ
9/18(木)	小樽、余市、銀山など障害者施設を訪問
9/19(金)	地元の方の案内により小樽から札幌を訪問



私は、「現代社会論」という授業の中で、先生から「北海道に行きませんか」というお誘いを受けました。「物を自ら作る」という授業テーマがあるのですが、そのテーマを自分の目で見て体験することにより何か見えてくるのではないかと。このような経緯により一から物を作るということは、一体どういうことなのかを北海道に観に行きました。北海道に行く中で先生が30年前に勤めていた障害者施設に行くということもありました。先生が勤めていた場所は北海道の銀山という場所で自分も全く知らない土地でした。どのような土地であるか一言で表すとすれば、山です。周りにはほとんど何もなく、少しだけ舗装された道路、木や森が大半をしめていました。しかし先生が30年前に勤め始めた頃は、整備も何もされていなかったという話を聞きました。先生と他の職員が一から作り出していったそうです。先生が「今植えてある木は私たちが植えたものもあるんですよ」と嬉しそうに話していた顔は、なんだか満足そうな顔に見えました。



勤めていた施設にいた利用者さんにも会いに行きました。30年ぶりに会うって一体どういう感覚なのだろうと、そんなに長く生きてもない自分にとっては想像もつかないような感覚でした。自分が先生と利用者さんが再会した中で最も印象に残っていることについて書いていきたいと思います。利用者Aさん、Bさんというかなりご高齢になられた姉妹の方々がいらっしゃいました。先生が職員でいた時にAさんBさんの親御さんが亡くなってしまったということがありました。その際に先生にお葬式などを開くのを手伝ってもらい、大変良くしてもらったということがあったそうです。その後すぐに千葉に帰ることになり、30年間会えずにいたそうです。そして今回北海道の銀山に行くことになり30年ぶりに再会することができました。30年間の長い時間の中でAさんBさんは、かなり小さくなっていたということの後で先生から聞きました。

先生とAさんBさんが再会し、少しの時間話し込んでいたのですが突然AさんBさんが泣き始めたのです。30年ぶりにAさんBさんの親御さんのお墓参りに行ってきましたという話をしたそうです。AさんBさんは先生に感謝の想いから泣いたのだとその時わかりました。その姿を見て自分は、おもわず涙ぐんでしまいました。30年間、全く会うことも出来ずにいた三人がここで今再会できたことは自分にもとても嬉しく思えました。ここまでの長い繋がりというものには簡単には形成していくことができないなと実感しました。自分もここまでの長い繋がりというものを作っていきたいと思い、先生が羨ましくなりました。(長尾 颯人)





11月26日（水）、今回ご紹介した「福祉の音プロジェクト」と1年生授業総合演習の「基礎ゼミ明石クラス」の合同企画により、（社福）トット基金・日本ろう者劇団代表代行/トット文化館手話教室講師の井崎哲也氏をお招きして、ワークショップ形式の講演をしていただきました。井崎氏は、俳優として、また手話狂言の第一人者として、国際的に活躍されている方です。講演中は井崎先生のお話にひきこまれながら、言葉以外の方法（手話やサインマーム等）でお互いを伝え合いました。

編集後記

今年も終わろうとしています。皆さんは今年1年どんなことに心が動きましたか？ 心が「湧く」「湧く」ことが「わくわく」の語源ですが、同じ「わくわく」でも、思わず弾み出したくなる「わくわく」もあれば、心の奥底から静かに広がる「わくわく」もあるでしょう。今回特集のフィールドワークは2ヶ月以上前に湧いた「わくわく」ですが、今、改めてふりかえてみていかがでしょうか。1年生の皆さんは、この報告を読んで、来年の自分にどんな期待を持ったでしょうか。

今回は、さまざまな未知と出会っての「わくわく」でしたが、普段の日常生活にも「わくわく」はたくさんたくさんあると思います。心が動くこと、わくわくすることは、生きている！という実感に、そして何かをするときの原動力になりませんか。次は2015年の発行です。皆さんの心がわくわくする年になりますように！（田中）

★INFORMATION★

明德HPの「めいたんブログ」でも、明德の「今」を日々発信しています。ぜひご覧下さい。

<http://chibameitoku.blog53.fc2.com>

発行：千葉明德短期大学

千葉市中央区南生実町1412

Tel :043-265-1613

Fax:043-265-1627

mail:tandai@chibameitoku.ac.jp

URL:<http://www.chibameitoku.ac.jp/tandai.html>

編集

田中 葵
伊藤 恵里子
高森 智子



読者の皆様へ：『月歩学歩』に対するご意見、ご感想を郵便やメールにてお寄せ下さい。

明德の12月



6、20日（土）

- ・入試面談
- ・公開授業

12日（金）

- ・研修生スクーリング

13日（土）

- ・第47回スターボックスお話しライブ
- ・スタートアップ・カレッジ
- ・42回生Home Coming Day

21日（日）

- ・手話合唱レコーディング

23日～1月6日

- ・冬季休業